

新しいかたちの墓地をつくる

Designing a New Type of Cemeteries

関野 らん Ran SEKINO

株式会社 SRAN DESIGN
SRAN DESIGN Inc.



孤独を受けとめる空間を作りたい。深い悲しみにある人を救いたい。人生の壁にぶつかったとき、孤独感に苛まれてどうしようもないとき、ふと一人で物思いにふけれる場所をつくれたら。空間が誰かの心の支えになることができれば。他の公共空間とは違う、墓だからこそそれができる。

墓に向き合い、死ぬこと、生きること、故人を想うことを考えてきた。学生のころから墓の研究と設計に携わり、気づけば10年を優に過ぎていた。

過渡期にある墓地

宗教離れや跡継ぎ不足などにより、従来の墓石のかたちの墓地が敬遠されつつある中、新たな形式の墓地が増えてきている。大学院在学中に墓地を設計する機会をいただき、それから樹木葬墓地と呼ばれる新しい形式の墓地の設計に継続的に携わらせていただいている。人にとって最も重要な場所とも言える墓地に対して、自分が新しい形式を提案する機会をもらえていることに勝手にプレッシャーを感じ、びくびくしながら設計をしていた。誰にでも受け入れられるものを作らなくてはいけないと思っていた。なるべく違和感を持たれないように、なるべく目立たないように、誰からも非難されないものを。それはデザインとしてはあまりにも消極的なものだっただろう。

模範解答を出せるよう考え続けていたが、そもそも自分が未熟なのにそんな設計ができるわけない。行き詰まりを感じ、10年経ってやっと、10年墓地のことを考え続けている人はそう多くはないはずだから、自分の中に蓄積されたものを信じ、たった一人にでも寄り添える場所となれればと思った。

樹木葬墓地は一般的には樹木をシンボルとし、その根本に遺骨を埋葬する形式である。20年ほど前から日本各地でつくられるようになったが、その根本には「土に還る」という考えがある。自然循環や環境、長い歴史の中にある自分の存在を感じられる場所、それこそが墓地ではないかと考えた。故人を想うことや死について考えることからではなく、人の存在、生きを考えることが墓地の空間を設計する手がかりになるのではないか。

「個別性」と「連続性／全体性」

人が生きるとは、墓地の設計とは、「個別性」と「連続性／全体性」の境界を作ることなのではないかと今は考えている。

人はだれしも一人一人がかけがえのない存在であると同時に、周りの人とつながりを持って生きている。また、今の自分という存在は、人間の長い歴史の一部でもある。

自分が一人の「個別性」を持った存在であると同時に、時間的・空間的にも人や環境とのつながり＝「連続性／全体性」の中にある存在である。これらのどちらも感じられることが生きている実感につながるのではないか。それを設計に落とし込んだのが東京都八王子市の風の丘樹木葬墓地である。

敷地は、高尾山からつながる多摩丘陵の一部で、50年ほど前に住宅造成により切り取られた場所の一番高い丘にあり、空が開けて見えて風が吹き抜ける心地よい場所だった。

ここを一つの場所として区切るのはいらない。周りの地形の一部のような、地球と一体化したものと見えるよう、埋葬エリアは石のモニュメントを骨格とし、周囲の山の地脈で押し上げられたような形を考えた。周囲の地形と「連続性」を持つようにアンジュレーションを作りつつも、埋葬されるエリアの周りには水を流しその内側が埋葬される特別な場所（＝「個別性」）として浮き上がるようにした。

埋葬エリアは、図面上では区画が格子状に並んでいるが、一面芝生で覆われ構造的には区画の区切りはない。埋葬され



図-1 風の丘樹木葬墓地 -1

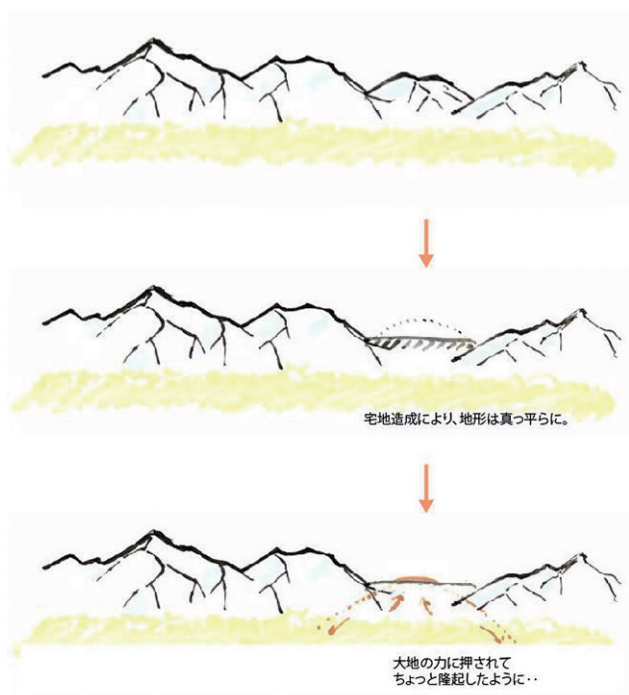


図-2 風の丘樹木葬墓地 ダイアグラム

たときには芝生に穴の跡が残るが、それが時間をかけて馴染んでいく。献花は花束ではなく、花の部分だけを水に浮かべる。花束は墓石があり両側に花筒があるからこそ献花したときに映える。多くの方が一緒に丘に眠るこの墓地で、たくさんのお花が集まった時に一番墓が美しく見えるよう検討した。空間だけでなく一人一人のお花をあげるという行為も、「連続性」を作って全体を美しくする要素と考えている。

新しいものを作ること

風の丘樹木葬墓地は、樹木葬の一つのかたち、「個性」と「連続性／全体性」の一つのあり方の提案だ。それは敷地の場所や時代によって様々な形があるだろう。しかし竣工した場所はもう変わることはできない。できる限り長く受け継がれていくことが望まれる墓地というものに新しい形式を取り入れ、それが人々に受け入れられるか。設計者としては、その場所自体がその存在意義を肯定しうる空間を設計できれば望ましいだろう。その責任の重さに毎回押しつぶされそうになる。しかしそれは墓地だけでなく、竣工したものに責任を持つのはどんな設計でも同じだ。そもそも設計者を志した理由の一つとして、自分の行動に責任を持ちたいという思いがあった。見えない大きな規模の範囲にまで頭を働かせることが決して得意とは言えないので、できるだけ目に見えるものに携わりたいて考えていたが、複雑な世の中ではどんなに小さな仕事を選んだとしても、どんな材料も自分が把握しきれない会ったこともない人の手を経由し、計り知れないところにまで影響が及んでいる。仕事をしていくほどそれがより一層実感され臆病になってしまうが、萎縮したところで良いものが設計



図-3 風の丘樹木葬墓地 -2



図-4 風の丘樹木葬墓地 献花台

できる作るわけではない。設計者として生きていく以上設計することに責任を持ち覚悟を決め、設計したものができるだけ社会に貢献できるようにしなくては行けない。情報を把握するには限界があるから、最後は自分の感覚を磨きそこから作り上げるしかない。自分は賑わう場所の真逆の静謐な空間を設計することが向いているのかもしれないと最近感じている。賑わう場所を設計するにしても逆の視点から考えることが活かせるかもしれない。風の丘樹木葬墓地では、半日ほどの長い時間、墓地を眺めて過ごす方、週2～3回訪れる方もいるという。自分が目標としてきた、一人で物思いにふけることができる空間が少しでも実現できたと信じたい。

ランドスケープデザイナー / 建築家

東京大学工学部社会基盤学科、同大学院修士課程にて、建築家 内藤廣に師事し土木と建築を学ぶ。川添善行・都市・建築設計研究所勤務を経て、2011年SRAN DESIGN設立。大学院在籍時より、従来の墓地の研究とともに、新しい埋葬形式を探求した墓地の設計に携わり、現在まで多様な墓地の設計を行う。主な作品「風の丘樹木葬墓地」(東京都八王子市)、「樹木葬墓地 桜の里」(東京都町田市)など。